

Writing
Center

KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY



関西学院大学
教務機構

ライティングセンター
5周年記念シンポジウム
報告書



関西学院大学
教務機構
ライティングセンター
5周年記念シンポジウム
報告書

目次

開会挨拶

中野 康人 ライティングセンター長 / 社会学部教授

ライティングセンター設立の背景

時任 隼平 ライティングセンター委員 / 高等教育推進センター教授

開講科目に関する取り組み

福山 佑樹 ライティングセンター教育特別任期制教授

対面指導に関する取り組み

福山 佑樹 ライティングセンター教育特別任期制教授

ライティングセンタースタッフと受講生・利用者による座談会

ファシリテーター 久保 慎祐野 ライティングセンター契約助手

[第1部] 学部・大学院におけるライティング科目

奥村 晴 ライティングセンター教育指導員 / 学部授業受講生・Learning Assistant

竹村 衣織 ライティングセンター教育指導員 / 大学院授業受講生

横山 和奏 文学部3年 / 学部授業受講生・Learning Assistant

福山 佑樹 ライティングセンター教育特別任期制教授

[第2部] 対面指導

中根 有紀子 ライティングセンター教育指導員

吉岡 もと ライティングセンター教育指導員 / 対面指導利用経験者

冷水 千夜莉 経済学部1年 / 対面指導利用経験者

笠井 遠音 ライティングセンター契約助手

閉会挨拶

児島 幸治 ライティングセンター副長 / 国際学部教授

開会挨拶



中野 康人

ライティングセンター長 / 社会学部教授

皆さん、こんにちは。本日は教務機構ライティングセンターの開設5周年記念シンポジウムにご来場いただき、誠にありがとうございます。私はライティングセンター長という役職を拝命しております。

ライティングセンターは2020年4月に開設されました。センター長・副センター長・センター委員は大学内の様々な組織から集まって運営を担当している教員です。ライティングセンターの専属スタッフとしては任期制教員が3名、契約助手が2名、アルバイト職員が2名います。さらにライティングセンターは本学の教務機構という組織の中に位置していますので、そこに所属する専任職員が複数名加わり、そして教育指導員として多くの大学院生たちに支えられながら活動しています。

このうち、センター長と副センター長は、教務機構のさまざまな役職を兼ねている大学教員です。大学教員ですからライティングについての知識はありますが、ライティングそのものを研究対象・指導対象にしているわけではありません。そのため、実質的なライティングの教育・研究開発は任期制教員や契約助手、そして大学院生の皆さんといった、いわばライティングの専門家に任せているという形です。

本日のシンポジウムでも、私のような立場の者は最初と最後にごあいさつ程度しかいたしません。中ほどに出てくる先生方や助手の方々、また大学院生の皆さんが専門家として具体的なお話をしてくださいますので、そちらを楽しんでいただければと思います。

私は教務機構の仕事をもう何年も担っており、ライティングセンターの設立当初から関わらせていただいています。先ほど研究室の書類を探したところ、「ライティングセンター」という言葉が初めて正式に議題に上ったのは、2019年6月25日の「2019年度第3回教務委員会」でした。そこから公の場で設置の議論が始まったようです。それ以前の2019年度4月には、教務機構内でライティングセンター設立のワーキンググループができていて、さらに本学の長期計画「KWANSEI GRAND CHALLENGE 2039」の中で、ライティングセンターを設立する構想が既に示されていました。

2019年度当初、私は教務機構の人間ではなく、学部の教務担当としてその会議に参加していましたが、「ライティングセンターを設置する」という提案が出たときには、議論が非常に沸騰したことを覚えてい

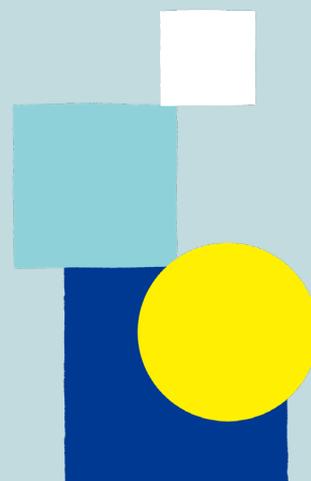
ます。「ライティング指導の必要性」は多くの人が感じていた一方で、それぞれの学部や分野で書き方や論文の構成がまるで違うのに、全学組織として本当に対応できるのか、という疑問の声がかなりありました。私の所属する社会学部でも分野が違うと書き方が違いますし、学問分野が変われば「どう書くか」は大きく変わってしまいます。

さらに、ライティング指導を大学院生が担うことについても意見が割れていました。大学院生にとっては教育経験が積めるし、収入の面でもプラスになるという利点がある一方、真面目な人ほど研究の時間を削ってしまうのではないか、といった懸念も出ていたのです。今回シンポジウムに参加している指導員の方々が、そのあたりをどう乗り越えてきたのか、あるいはまだ模索中なのか、ぜひ皆さんとシェアしていただければと思います。

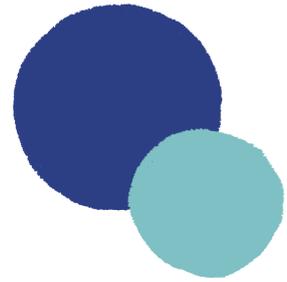
こうした議論を経て、2019年度中には最終的にライティングセンターを設置することが認められ、「トントン」と今日に至ったわけですが、実際にはその途

中で、先生方の採用プロセスや具体的な運営体制の構築など、大変な作業がありました。2019年度末から2020年度にかけてセンターを立ち上げようというとき、ちょうど新型コロナウイルス感染症の拡大が起こり、大学業界全体が混乱の渦に巻き込まれました。そもそも新しいセンターをつくるだけでも大変な作業なのに、そのタイミングでオンライン授業に全面移行しなくてはならなくなり、本当に初めてのことばかりでした。それでも乗り越えてくださった先生方やスタッフの皆さんには、感謝の気持ちでいっぱいです。

当ライティングセンターは設立以来5年が経ちましたが、本日のシンポジウムでは、センターにまつわるさまざまな活動内容や課題、今後の展望などを包み隠さずご紹介したいと思っています。気温の変化が激しい季節ですので、皆さんも体調には十分気をつけていただきながら、数時間のシンポジウムをお楽しみいただければ幸いです。以上、センター長の中野からの挨拶でした。



ライティングセンター設立の背景



時任 隼平

ライティングセンター委員 / 高等教育推進センター教授

皆さん、こんにちは。ライティングセンター委員の時任です。私からはライティングセンター設立の背景についてお話しさせていただきます。私も中野先生と同じように、設立の初期段階から関わらせていただいておりますが、その前段階にある構想段階の担当者にも話を伺って、その内容をまとめてみました。今日の話は3点あり、まず1つ目が、「学院として組織的にどう考えていたか、そこに関わる人たちがどう考えていたか」という点です。そして2つ目に、「私自身がこの構想に関わるようになって、ライティング教育についてどのような問題意識を持っていたか、どのようなことに配慮したのか」、最後に「今当時に振り返ってみて思うこと」という形になります。

学院としての組織的な問題意識

1つ目です。先ほど中野先生からもお話があったように、このライティングセンターを立ち上げるにあたって、いきなり案が出てきたわけではなく、全学でそもそもどういうライティング教育が行われているのかを、当時構想の中心にいたメンバーが調べていました。そこで各学部で「ライティング教育が必要だ」という意識があり、実際に何らかの形で教育をしていました。ただ、その内容にばらつきがあっ

たということが分かりました。ある学部はこの部分を重視しているけれど、ある学部は別の部分を重視しているといった具合で、ライティングは専門分野と結びつく部分と、基礎になる言語化の部分、つまり汎用的なスキルの部分とがありますが、その汎用的な部分を扱うかどうかには差があるということが、下調べの段階で分かってきました。さらに、共通教育を担当する部署で「スタディスキルセミナー」という枠組みでライティングの授業を提供してはいたものの、1クラスにつき30名程度という小規模だったため、約25,000人の学生全員に行き届かないという問題意識があったようです。また、学部科目と全学開講科目の間で内容が重複したり、不足していたりするところがあるので、そこを整理する必要があるというのも当初の問題意識の1つだったそうです。例えば法学部なら、その学問領域に特化したライティングの力を付けることが目的になるでしょうし、全学開講科目ではそういう専門知識には踏み込めませんから、むしろ汎用的・論理的な力を付ける方向でやりましょうといった形で、すみ分けをしていく必要があるという認識が背景にありました。

ライティングセンターの構想段階で行ったこととしては、既存の授業の位置付けを整理して、維持するもの、縮小するもの、補強するものを決めた上で、ライティングセンターとして提供する全学開講科目の内容を検討するという流れがありました。私

1. 学院としての組織的な問題意識



【既存の授業内容と理論的枠組み、先行事例との整合性を確認】

◆授業計画

- [第 1回] 200字ライティング、ワーク1(主張、根拠の設定)
- [第 2回] 200字ライティング、ワーク2(学術的文章の構造) レポート(1)概要解説
- [第 3回] 200字ライティング、ワーク3(ロジックの飛躍を探す)
- [第 4回] 500字ライティング、ワーク4(引用文献の種類と書き方)
- [第 9回] 800字ライティング、ワーク9(留保条件の設定)
- [第 10回] レポート(2)執筆、ワーク10(限定条件の設定)
- [第 11回] レポート(2)執筆、ツールミンモデルの完成
- [第 12回] レポート(2)執筆、ヒアレビュー1
- [第 13回] レポート(2)執筆、ヒアレビュー2
- [第 14回] レポート(2)、ツールミンモデル完成 レポート(2)ワークシート提出イ切 1学期間の振り返り

経験をベースに作り上げた実践

ツールミンモデル (理論)

先行事例

(早稲田大学様、青山学院大学様)

議論の十字 (理論)

先行研究や事例

は 2015 年に着任したのですが、当時はライティングセンター構想には関わっていませんでした。ただ、着任当初から「スタディスキルセミナー」のライティング授業を偶然担当していて、そこでは 200 字ライティング、500 字ライティング、800 字ライティングといった手法を使って、段落ごとに文章を書き、そのロジックをしっかりと通せるようにするという指導をしていたんです。これは私のアメリカの大学への留学経験、あるいは大学院博士課程で受けたライティング指導がベースにあって、「これならうまくいくかもしれない」ということでやっていたものでした。ライティングセンターで開講する授業の設計にあたってはその個人的な経験をベースにして案を作りましたが、「ツールミンモデル」や「議論の十字」、それから、「ライティング教育に常に取り組みされている早稲田大学や青山学院大学などの先行事例がどういう理論に基づいて授業を展開しているかを聞きながら、整理して新しく作っていくという流れがありました。ですから、もともと私が担当していた授業をそのままというわけではなく、学術的な理論や先行事例と重ね合わせながら作り上げていった、という背景があります。

委員としての個人的な問題意識

ここまでお話したことは組織的にやってきたことですが、私が委員として関わる中で個人的に意識していたことは、高等学校の変化でした。当時はちょうど学習指導要領が変わる時期で、探究的な学びが増加するというのが一目瞭然だったんですね。今の高校1年生、2年生、3年生は新課程で学んでいますが、「総合的な探究の時間」

が全ての学校で必修になっています。われわれのころにはなかった理数探究基礎、古典探究、地理探究、世界史探究といった科目が開設されていて、研究活動の特徴を取り入れた授業を高校生たちが受けています。実際に論文を書くような課題研究も行われていて、例えば兵庫県の Super Science High school の指定を受けている公立高校では、Python を使って主成分分析をしたという論文を高校3年生が書いており、そのような学生が大学に入ってくるわけです。そうすると、大学のライティング教育がしっかりしていないと「大学に入ったら、全然ライティング教育が良くない」と思われてしまう。それは良くないなと個人的には感じていました。ただ、会議では少し論点がずれる可能性があるため、あまり全面には出しませんでしたが、私は個人的に非常に大事なことだと思っていました。

構想段階にて配慮したこと

このように、構想を進める上で気を付けていたのは、既存の授業の位置付けを丁寧に整理することです。学内にはすでにライティング教育をしている先生方もいらっしゃるのですが、内容が過度に重複してしまわないかとか、補完関係にあるのかどうかをきちんと話し合えないといけない。あとは、高等教育の潮流に照らしてなぜライティング教育が必要なのかという説明も求められます。理屈付けの部分ですね。そういう意味で言うと、ライティング教育は大学で大事だという研究はたくさんありますし、そこを踏まえて「世の中もこういうことを求めていますよ」という説明が必要になると思います。

最後に、今のライティングセンターを見てもそうですが、授業を企画したり実施したり、研修をしたり、対面指導、研究、広報など、本当に多くのタスクがあって、それらを適切にできる人をどうやって確保するかがすごく大事だったんだろうと思います。一人が特定のタスクだけやればいい、というのではなく、いろいろな専門的な知識や技能、経験が必要で、それらが合わさって成り立っているという感じですね。このように構想段階からの流れを振り返ると、もともと関西学院として共通教育を充実させなければいけないというミッションがあり、その中でライティング教育に関する議論も10年単位で続けてきたという経緯があります。もしこの中でも「ライティングセンターを立ち上げたい」と考えている方がいらっしゃるなら、まずは学内における既存の取り組みがどうなっているかを分析して、どこが重複しておりどこが違うのかを明確にすることや、高等教育の潮流や専攻研究ともつながるといってロジックをきちんと提示することが大事なのかなと思います。最後は人材の確保ですね。本当にそこが重要だということを、今振り返っても感じます。私の話は以上になります。ありがとうございました。

2. 委員としての個人的な問題意識



【高等学校教育の変化】

・新学習指導要領における探究的な学びの増加

高等学校で展開される探究学習

理数探究基礎 (理数)
 理数探究 (理数)
 古典探究 (国語)
 地理探究 (地理歴史)
 世界史探究 (地理歴史)
 日本史探究 (地理歴史)

総合的な探究の時間

高等学校学習指導要領 (平成30年告示)

高等学校における探究教育は

「研究活動」の特徴を取り入れた学習活動に相当する。

溝上 (2016)
林・神戸大学附属中等教育学校 (2019)

高校教育段階における論文執筆経験の増加

開講科目に関する取り組み



福山 佑樹

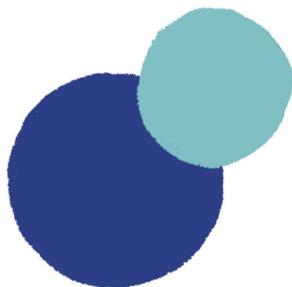
ライティングセンター教育特別任期制教授

ライティングセンターにおける開講科目について、福山からお話させていただきます。具体的には、まず現在ライティングセンターで展開している3つの科目について、それらの概要を簡単にご説明いたします。その後、開講科目の中でもっともボリュームの多い「レポート執筆の基礎」という科目について、特徴や受講者アンケートの結果なども交えてご紹介していく予定です。

開講科目の概要

さて、ライティングセンターにおける科目開講についてですが、2020年から現在にかけて3つの科目を展開してきました。まずライティングセンターが開設された2020年度の春学期には「スタディスキルセミナー（レポート執筆の基礎）」（以下、「レポート執筆の基礎」）を開講しました。

その後、同年秋学期には大学院生向け科目「論文執筆のためのアカデミックライティング」が開講され、2021年度には「レポート執筆の基礎」を、神戸三田キャンパスと西宮聖和キャンパスに展開しました。2022年からは、「レポート執筆の基礎」の中に対面授業とオンデマンド授業を組み合わせた、いわゆるハイブリッド形式の授業を試験的に提供しています。そして2024年秋学期には、新たに「レポート執筆の応用演習」という応用科目を開講しました。以上のように、ライティングセンターで開講しているのは、学部生向けの「レポート執筆の基礎」「レポート執筆の応用演習」、そして大学院生向けの「論文執筆のためのアカデミックライティング」の3科目となります。



開講授業科目の概要



●2020年度から現在までの開講科目の展開



「レポート執筆の基礎」は、1年生から4年生までのすべての学部生を対象とした科目で、現在は上ヶ原キャンパスと三田キャンパスで開講しています。1クラスの定員は20名で、事前申し込み・抽選制となっています。この科目は、レポート課題の書き方が分からず不安を感じている学部生が主な対象です。授業で扱うのは、2,000字程度までの論証型レポートで、文献を調査し、その内容を引用しながら自分の意見を論じていくスタイルのものです。授業では、教員による添削や、いわゆるピアレビュー（受講生同士の相互評価）を通じて進めていきます。各学部に通じる基本的なライティングスキルや論理的思考力の習得を目指す内容となっています。

次に、新たに開講した「レポート執筆の応用演習」ですが、こちらもすべての学部生を対象としています。上ヶ原キャンパスのみで、秋学期に2コマを開講しています。この科目は「レポート執筆の基礎」の内容を踏まえた応用科目となります。「応用演習」では「レポート執筆の基礎」の課題であった、より長文のレポート、たとえば卒論のように章立てを行い、「はじめに」から「まとめ／おわりに」までを構成するようなタイプのレポートへの対応不足に 대응するために開講しました。この「応用演習」では、社会科学的なテーマを対象として、学生が今後ゼミ等に配属された後に行うであろう研究の練習を行うことも目的としています。具体的には論証型だけでなくアンケート調査を行うようなレポートなど、学生の希望を踏まえて形式を選択できるようにしています。「応用演習」はこのような形で5,000字以上のレポートを半期をかけて1本しっかり仕上げるといった内容になっています。

最後に大学院生向け科目として、「論文執筆のためのアカデミックライティング」があります。これは論文執筆を目指している、または改めてレポートの書き方を学びたいと考えている修士課程・博士課程の学生を対象としており、春・秋学期ともに、通常授業（14回通期）と、夏休み・春休みに集中講義形式で実施する2つのスタイルで開講しています。この科目は、教育指導員の養成も兼ねた内容となっている点が特徴です。また「レポート執筆の基礎」や「応用演習」の内容をベースとしつつも、特に専門分野が異なる大学院

生同士によるピアレビューを取り入れていることも特徴の1つです。自分の研究内容を、その分野を知らない他者に分かりやすく伝えるという点に重点を置いて、授業を進めています。

スタディスキルセミナー（レポート執筆の基礎）

それでは、私たちが最も多く提供している「レポート執筆の基礎」という科目について、少し長めに時間を取ってご紹介します。まずこの科目の目的としては、「学部におけるレポート執筆に必要な基礎的な知識や技術の習得」を目指しています。先ほど時任先生のお話にもありましたように、この科目は、全学部の学生が受講する可能性があるという点で、各学部において共通性の高い汎用的な内容を扱っています。具体的には、アカデミックな文章における「表現」、「執筆のルール」、「構成」の理解とその実践を重視しています。

学生にはよく、「他の科目のシラバスには『理解する』『知識を得る』といった表現が多く見られると思いますが、この科目では『実践する』ことがゴールです」と伝えていきます。頭で理解するだけでなく、実際に自分の手で基準を満たしたレポートを書くことが、この授業での到達目標であることを強調しています。

授業の進め方については、「反転授業」という形式を採用しています。授業時間内での「講義」は極力少なくし、教室では「書く・添削する・修正する・ワークを行う」といった実習を中心に進めています。具体的には、学生は授業外課題として講義動画を視聴し、その内容に基づいたワークを行い、LMS（学習管理システム）に提出する、というところまでが課題として課されます。授業内では、提出されたワークをもとにペアワークを行い、文章執筆、添削、ピアレビューなど対面ならではの活動を実施しています。また、LMSを通じて教員が多くのフィードバックを行うようにしており、そうした点も授業の大きな特徴となっています。

ここで履修状況について説明します。毎年春学期は非常にニーズが高く、ほぼ定員に達しています。一方で、秋学期の履修率は一番低い時で36.4%まで落ち込んだこともあり、秋の受講者確保が課題となっています。とはいえ、近年は少しずつ持ち直す傾向も見られます。

開講授業科目の概要

●現在開講している科目

対象	開講 キャンパス	提供 クラス数	履修 定員	備考	
スタディスキルセミナー (レポート執筆の基礎)	1年～4年の 全学生	西宮上ヶ原 神戸三田	春：18 秋：16	最大 20名	・抽選科目 ・オンデマンドを組み合わせたハイブリッド形式の 授業を春3クラス・秋3クラス提供
スタディスキルセミナー (レポート執筆の応用演習)	1年～4年の 全学生	西宮上ヶ原	秋：2	最大 20名	・抽選科目 ・「スタディスキルセミナー（レポート執筆の基 礎）」を事前に履修することを推奨
論文執筆のための アカデミックライティング	大学院修士課 程・博士課程 学生	西宮上ヶ原	春：2 秋：2	最大 20名	・ライティングセンターで学修支援に携わる 「教育指導員」養成も兼ねる科目 ・集中講義も提供



スタディスキルセミナー(レポート執筆の基礎)



●提供クラス数・受講定員・履修者数

年度	提供クラス数		受講定員		履修者数		充足率	
	14クラス	280名	242名	522名	86.4%	93.2%		
2020年度 春学期	14クラス	280名	242名	522名	86.4%	93.2%		
2020年度 秋学期	14クラス	280名	280名	522名	100.0%			
2021年度 春学期	18クラス	360名	360名	583名	100.0%	81.0% ↓		
2021年度 秋学期	18クラス	360名	720名	223名	61.9%			
2022年度 春学期	18クラス	360名	390名	509名	91.3%	62.8% ↓		
2022年度 秋学期	18クラス	420名	810名	153名	36.4%			
2023年度 春学期	18クラス	360名	339名	542名	94.2%	75.3% ↑		
2023年度 秋学期	18クラス	360名	720名	203名	56.4%			
2024年度 春学期	18クラス	360名	360名	582名	100.0%	85.6% ↑		
2024年度 秋学期	16クラス	320名	680名	222名	69.4%			

スタディスキルセミナー(レポート執筆の基礎)



●履修者の特徴と履修動機

- 1年生の割合が高い(約70%~85%の受講生が1年生)
- 2年生が全体の10~15%で、3・4年生が5~10%程度

- ・【大学でのレポート執筆に不安があった】 **84.4%**
- ・【文章執筆に苦手意識があった】 **73.1%**
- ・【授業を通してレポート執筆に関するスキルが身につくと感じた】 **64.5%**
- ・【開講曜限の都合がよかった】 **24.1%**
- ・【卒業論文・ゼミ論文などの執筆準備をしたかった】 **22.5%**
- ・【授業を通して論理的思考力が身につくと感じた】 **22.3%**
- ・【授業内容が面白そうだった】 **12.2%**

この授業の対象は全学年となっていますが、実際には1年生の受講が多く、履修動機としては「レポート執筆に不安がある」という回答が80%以上を占めています。また「苦手意識を克服したい」「スキルを身につけたい」といった理由も上位を占めています。上級生については、「ゼミ論や卒論の準備」という回答も一定数あるため、このようなモチベーションで受講していると考えられます。

「レポート執筆の基礎」の特徴

授業の特徴として4点があります。1点目は先ほど申し上げた、宿題として講義動画を視聴して、授業時間内には演習時間を多く取る反転授業形式であること。2点目は、時任先生のご発表にもありましたが、段階を踏んで文章を書かせていく点。3点目は、授業の内外で教員が丁寧なフィードバックを行う点。4点目は、初回と最終回の授業で執筆文章を比較し、学習成果を振り返る機会を設けている点です。

先ほど、事前に授業前課題として、動画教材を見ることが課題ですと申し上げたのですが、動画教材については、1本5~15分程度の講義動画を10本制作しています。この動画を用いて反転授業形式で授業を行うことが特徴の1つとなります。

また授業内で学生が執筆するライティング課題は段階を追って行われます。初回授業では、まず「テーマ指定ライティング」を行います。これは何の指導

も行わない状態で書いてもらうもので、学生の受講時点での文章力を把握するために行っています。その後、ツールミンモデルを用いて本論を構成する「主張・根拠・論拠」について学び、それをもとに「500字ライティング」として本論の1パラグラフ分を執筆します。後ほどご説明しますが、この課題には、非常に手厚いフィードバックを行っています。続いて、序論と結論のパラグラフの書き方を学んでから「三部構成ライティング」として序論から結論までの全てが揃った1,000~1,500字程度のレポートを執筆します。そして最終の期末レポートでは、これまでの学習内容を総合して、2,000~2,500字のレポートを仕上げてもらいます。これらが授業で扱う4つの主要な課題です。「本論のみ」の書き方から序論、結論が含まれた文章へと段階的に執筆していく点が授業の2つめの特徴となります。

3つめの「丁寧なフィードバック」についてです。まず「500字ライティング」課題の初稿に対しては、「個別カンファレンス」という取り組みを実施しています。これはもともとはLMS上で文字によるフィードバックのみを返していたのですが、文章執筆が苦手な学生にとっては、文字だけの指摘では何を指摘されているのか理解することが難しいという声がありました。そこで、20名の受講生を10名ずつに分けて、2回の授業を使って1人あたり5分程度口頭での指導=カンファレンスを行う形にしました。第2稿以降は、これまでと同様にWordのコメント機能を使って最大4回のフィードバックを行い、LMSを通じて返却しています。最も重要な「本論の書き方」を学生が取得するまで、何度も繰り返しフィードバックを行う点が特徴の3つめとなります。

また、初回と最終回の授業で文章を比較する「振り返りワーク」を行っています。最初に書いたテーマ指定ライティングと、最終課題である期末レポートを比較することで、「自分はどれだけ成長したのか」「どのような点が改善されたのか」といった学習プロセスを見つめ直す機会となります。

「レポート執筆の基礎」の特徴



動画教材による事前学習(反転授業)

- 1本あたり5分~15分程度の講義動画を10本作成(学内限定公開)
- 授業外学習として講義動画を視聴し、対応する課題を提出する

〈講義動画タイトル〉

「アカデミックな文章の全体像」「引用の方法と参考文献リストの書き方」「論理的な文章を書く」「論拠の構造」「引用に適した情報の選び方、剽窃に関する注意点」「アカデミックな文章に必要な表現」「パラグラフを書く」「主張が先か、根拠が先か」「論理の飛躍がない文章を書く」「学術的な文章の校閲」

受講者アンケート調査の結果

次に「レポート執筆の基礎」で毎学期末に取っているアンケート結果についても簡単にご紹介します。この授業では「この授業に満足した」「ライティング指導に満足した」「受講前に比べて良い文章が書けるようになった」「他の授業よりも教員からのフィードバックがあった」を「学生の満足度」として設定していますが、すべての項目において、非常に高い評価を得ています。

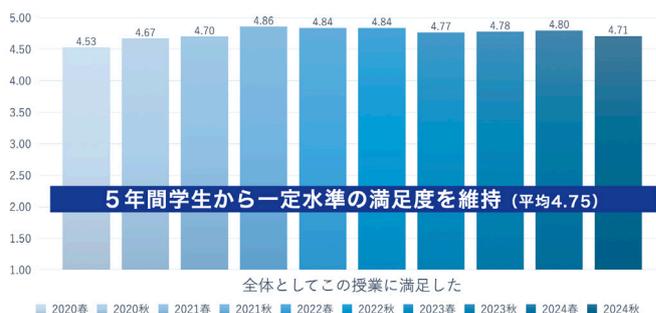
2020年春学期については、フルオンデマンド形式だったこともあり、やや評価が低いですが、それ以降は安定して全ての項目で満足度4.7以上（5点満点中）を維持しています。詳細な因果関係の分析までは行っていませんが、学生にフィードバックの量と質が高く評価され、結果的に文章力が向上し、授業全体への満足度につながっていると考えられます。

今後の展望

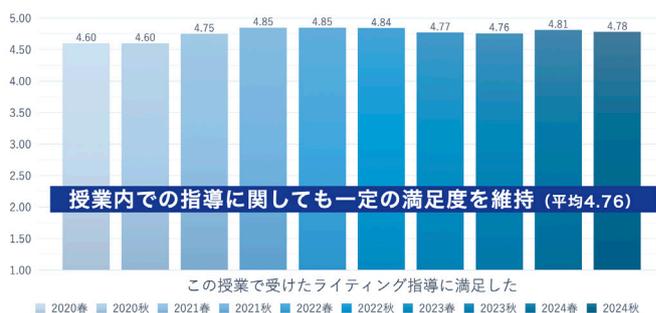
最後に、現時点での課題と展望についてお話しします。今学期、新たに開講した「レポート執筆の応用演習」ですが、「レポート執筆の基礎」を履修せずに受講する学生もいれば、履修済みの学生もおり、それぞれのニーズを把握しきれていないところがあります。今後はカリキュラム上の段階設計をしっかりと行い、さまざまな学生に対応可能な授業設計を行っていきたくと考えています。

また、先ほどもお話ししましたとおり、「レポート執筆の基礎」は抽選制となっており、春学期の特定時間帯には倍率が5倍以上になることもあります。ただ、春に落選した学生が秋学期に再度申し込んでくれているかという点、実際にはそうではないことが多いです。おそらく春学期に「不安だから受けたい」と思っていた学生も、なんとなく自己流のレポート執筆でやり過ごし、ギリギリでも単位が取れてしまえば、それで「もういいや」と満足してしまうのではないかと考えています。そうした学生にも受講機会が行き届くよう、たとえば春学期に開講数を増やすなど、何らかの手立てが必要だと感じています。

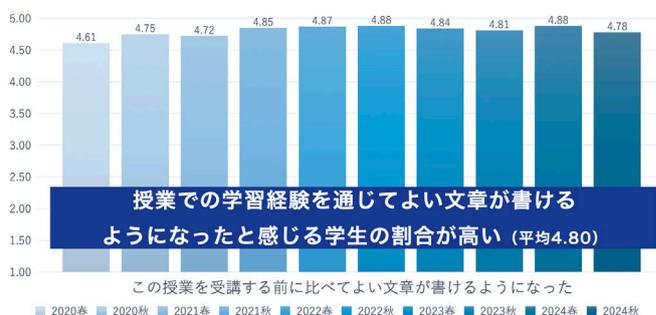
受講生アンケート調査の結果



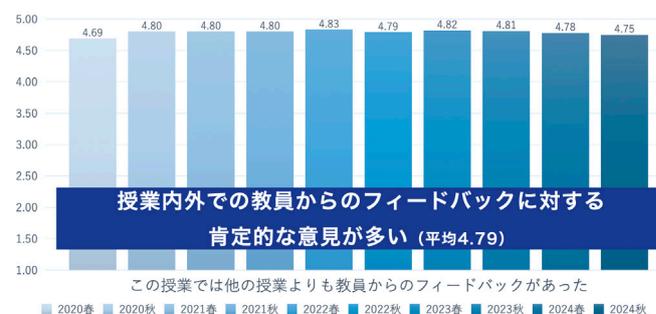
受講生アンケート調査の結果

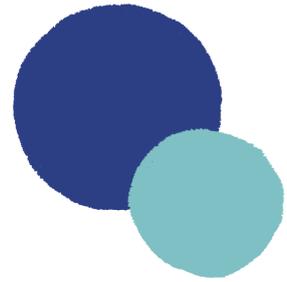


受講生アンケート調査の結果



受講生アンケート調査の結果





対面指導に関する取り組み



福山 佑樹

ライティングセンター教育特別任期制教授

引き続き「対面指導に関する取り組み」について、私、福山からお話させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、ライティングセンターにおける対面指導についてです。まず「対面指導を行う場所」としてのライティングセンターについて、どのような場所で、どのような指導が行われているのかを中心にお話します。続いて、対面指導を支えてくださっている「教育指導員」とはどのような方々か、またどのような研修を受けているのかをご紹介します。その後、対面指導の利用状況について、これまでの4年間の推移をお示しし、最後に広報や動画教材製作などの取り組みについても触れたいと思います。

ライティングセンターと対面指導

さて、ライティングセンターは現在、西宮上ヶ原キャンパスの大学図書館の地下に位置しています。もともとはカフェだった場所だそうですが、現在はその中に3つの個別支援ブースを設置しています。ブースでは専門的なトレーニングを受けた教育指導員がマンツーマンでの個別支援を行っています。

ライティングセンターの対面指導は、2020年度に開設準備としてトレーニング方法の検討や運営システムの構築を進めた上で、2021年度から本格的にス

タートしました。対面指導は、授業期間中であれば原則平日は毎日10時から17時まで、1セッションあたり45分、1日に7セッション実施しています。ブースの稼働数は利用状況に応じて変動し、利用者が多い時期には3ブースを同時に開設しています。逆に、新学期開始直後など利用が少ない時期には1ブースでの対応としています。

「対面指導」には、利用者にセンターに来室いただいて対面で行うオフラインのセッションと、Zoomを活用したオンラインのセッションの2つがあります。2021年度は活動制限の影響もあり、11月末までオンラインのみで対応していました。現在も、神戸三田キャンパスなど西宮上ヶ原キャンパス以外の学生に対しては、Zoomによるオンライン指導を中心に支援を提供しています。

ライティングセンターで相談可能な内容は、日本語で書かれたアカデミックな文章に限っています。具体的には、授業のリポート課題、卒業論文、研究計画書などです。最後まで執筆してある文章でも、執筆前のブレインストーミングの段階でも、ライティングにおけるどの段階でも相談可能です。また1つの課題について、複数回相談することも可能です。

支援の具体的な内容としては、文章の構成、内容、表現といったリポート執筆に関して多岐にわたる項目を扱っています。ただし、明確に「行わないこと」として定めている内容もあります。まず、「専門的な研

究内容への評価や助言」は行いません。たとえ教育指導員が学生の相談分野に精通していたとしても、研究としての価値判断や文献の優劣を語ることはしません。これは、ゼミ等での指導教員の役割と区別するためです。また、指導員は日本語指導のトレーニングは受けていないため、留学生向けの文法や表現の細かなチェックなど、専門的な言語支援は行わないとしています。加えて、就職活動に関連する書類（エントリーシートなど）の添削も、キャリアセンターの所掌として、ライティングセンターでは対応していません。

対面指導を支える教育指導員

次に、教育指導員についてご説明します。2024年秋学期現在、教育指導員は13名で構成されています。内訳は、修士課程の学生が8名、博士課程の学生が3名、博士課程修了者や研究員が2名という構成で、各学期で平均10名前後が勤務しています。

教育指導員の採用についてですが、採用審査には文章審査と面接審査があります。先ほどご紹介した「論文執筆のためのアカデミックライティング」を一定の成績で修了している場合は、文章審査が免除されます。この科目を未履修の場合は文章課題を提出し、履修者と同等の文章執筆レベルを持っていると判断される必要があります。面接審査では、模擬セッションを含む面接を実施します。契約助手を相手に模擬セッションを行い、教育指導員としての適性を総合的に評価したうえで、採用の可否を判断しています。

教育指導員としての採用後は、まず「採用時研修」を実施します。ライティングセンターの理念や心得を共有した上で、先輩指導員とのロールプレイを通じて基本的なセッションの流れを体験します。その後、「観察研修」では、実際のセッションを見学し、セッション記録シートを記入の上、担当者とディスカッションを行います。続く「ロールプレイ研修」では、契約助手や先輩指導員が学生役を務め、模擬セッションを実施し、終了後にフィードバックを受けます。これらを経て、実際の学生の対応が可能であると判

断された場合には「実地研修」に進みます。実地研修では、新人の教育指導員が実際にセッションを担当しますが、サポート役として契約助手や先輩指導員が同席し、必要な場合には介入を行います。最低3回の「実地研修」を経て、「1人で十分にセッションを担当できる」と判断された段階で教育指導員としての「独り立ち」となります。

また、対面指導のセッションを行う上で最も難しいのが「目標設定」です。つまり、持ち込まれた課題を見て、「何が課題なのか」「今日の45分で何を行うか」をセッション冒頭の短い時間で適切に設定することが、最も難しいポイントだと考えています。そのため、「文章診断・目標設定研修」を新人研修として必須としており、最低1回、必要であれば何度も繰り返して実施します。これらの研修を修了して独り立ちするまでには平均1～2か月ほどを要しています。

採用後の研修としては、毎年7月と1月の学期末に行う「振り返り研修」があります。これはワールドカフェのような形式で、今学期の課題や改善点について、指導員同士で議論する場を設けています。また、月1回の「集合研修」も実施しており、たとえばキャンパス自立支援室から合理的配慮について話を伺うといった他部署と連携した研修や、卒論の相談が増える時期には卒論を扱うセッションのポイントに関する研修、実験リポートのニーズが高い時期にはその対応法を皆で共有する研修など、毎月テーマを決めて実施しています。さらに、自己研鑽の時間として、予約が入っていないシフト時には、各自が課題を設定し、契約助手と相談しながらスキル向上に努めています。また他大学との合同研修なども、随時行っています。

対面指導の利用状況（4年間の推移）

それでは次に、ライティングセンターの4年間の利用状況について、ご説明させていただきます。まずは、実施セッション数と稼働率の推移についてです。開設1年目に実施したセッション数は573件でしたが、2022年度以降は徐々に増加し、2023～2024年度には900件を超えるまでになりました。総セッション数を実施セッション数で割った「稼働率」については、2021年から2023年度にかけて上昇しましたが、2024年度は横ばいとなっており、現在は概ね5割程度で推移しています。

稼働率が伸び悩んでいる一因として、秋学期の利用が比較的少ないということがあります。年間を通じた平均的な流れを見ると、若干特殊な動きがあった2021年度を除けば、4月に対面指導がスタートしてから、6月から7月にかけて春学期の利用率のピークを迎えます。その後、9月は新学期になり課題もいったんなくなるために利用が減り、その後秋学期を通じ

教育指導員の研修（採用時）



研修名	研修内容
採用時研修	ライティングセンターの理念や勤めるにあたっての心構えについての講義、先輩指導員とのロールプレイなどを実施
観察研修 (新規採用研修①)	契約助手や継続の教育指導員が実施する個別支援を観察し、気付いた点などをまとめ、議論する研修を実施（最低2回）
ロールプレイ研修 (新規採用研修②)	契約助手や継続の教育指導員を来訪した学部学生に見立てて、模擬支援に取り組み。その後、新規採用者は審査者からのフィードバックを実施（最低2回）
実地研修 (新規採用研修③)	契約助手や継続の教育指導員がサポートに入れる体制の元、実際と同じ形で個別支援に取り組み。その後、新規採用者と審査者でフィードバックを実施（最低3回）
文章診断・ 目標設定研修 (新規採用研修④)	個別支援で実際に使用した学生のレポート課題と、研修ワークシートを用いて、文章の問題点の整理と、個別支援の目標設定を模範的に行う研修を実施（最低1回）

※実地研修において1人でセッションを担当できると判定された指導員のみが
独り立ち=1人前としてセッションを担当する

て春学期ほどは利用率が高まらずに年度が終わると
いうサイクルになっています。

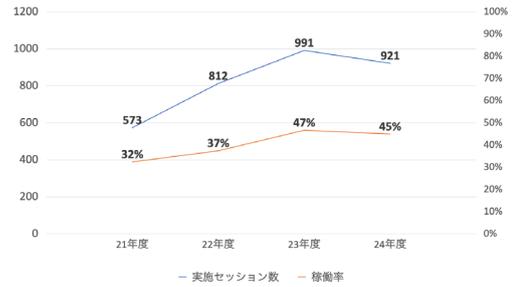
次に、学年別の利用状況についてご説明します。1
年生の利用が最も多く、利用者全体に占める割合は
徐々に減ってきているものの、年間 500 ～ 600 件程
度と、一定数の利用があります。近年の特徴としては、
4 年生の利用が 2023 年度から大きく増えていること
があります。これは、ニュースレターなどを通じて
「ゼミでも活用してください」といった呼びかけを教
員に対して行っており、その結果として卒論支援な
どに活用されるケースが増えているのではないかと
考えています。

満足度については、4 年間を通じて非常に高い水
準を維持しています。指導員の皆さんの努力のおか
げもあり、「今回のセッションに満足したか」「初め
に設定した目的どおりに進んだか」「セッション後
に何をすべきかが明確になったか」といった項目に
おいて、常に 5 点満点中 4.8 点を超えるなど高い評価
を得ています。

最後に、リピート率とオンライン指導の利用状況
について、簡単にご紹介します。まず、リピート率
です。1 年目はライティングセンターの認知度が高
くなかったこともあり、感度の高い学生が何度も利
用したのか比較的リピート率が高くなっています。2
年目には、約 7 割が「1 回きり」の利用だったのだ
ですが、2023 ～ 2024 年度には、2 回以上利用する学
生が再び半数近くになっています。利用者の中には、
ある学期に 20 回以上利用する学生もいて、「この子
は自立できるのだろうか…」と少し心配になること
もあります。ただ、そうした学生は次の学期になる
と利用回数が大きく減ることも多く、おそらくは、
センターを利用して一定の成果を感じた学生が次の
学期には「もう自分で書ける」とある程度自立して
いるのではないかと考えています。

オンライン指導の割合については、1 年目は活動
制限の影響で 11 月まで完全にオンラインだったこと
もあり、9 割以上と圧倒的に高い割合を示しました。
それ以降の年でも、全体の 1 割ほどは安定してオン
ライン指導が利用されています。上ヶ原キャンパス
の学生でも、授業がない日には Zoom で指導を受け
たいというケースがあるなど一定のニーズがあるた
め今後もオンライン指導は継続して行く予定です。

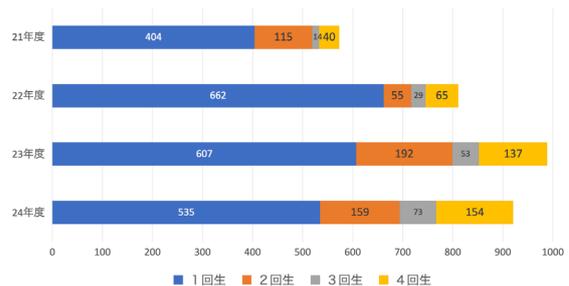
実施セッション数と稼働率の推移



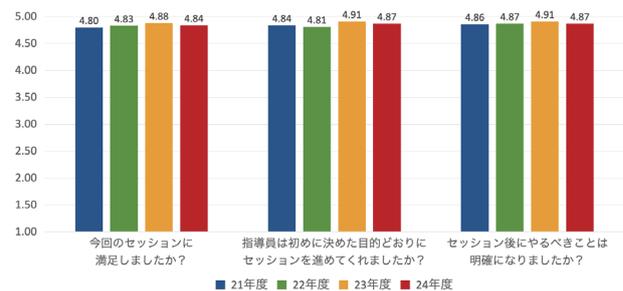
各年度の月別稼働率



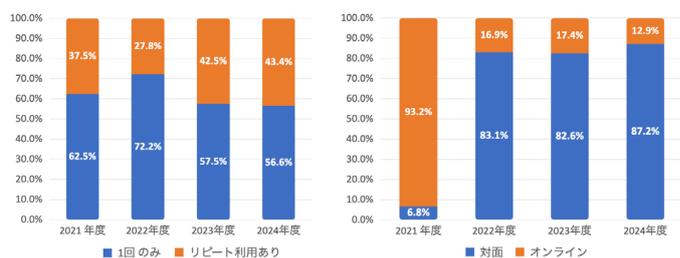
学年別利用状況



対面指導の利用満足度



その他のデータ (リピート率/オンライン率)



※年度単位での集計

※21年度は11月末までオンラインのみ

その他の活動の紹介

最後に、「その他の活動」についてご紹介します。本センターの特色のひとつとして、予約・広報ツールとしての「LINE 公式アカウント」の運用があります。年度初めのイベントなどで登録を呼びかけると、新入生を中心に多くの学生が登録してくれています。現在では約 1,800 人が登録しており、特に 1 年生の登録が多い状況です。対面指導の予約方法は複数用意していますが、LINE 経由で予約を行っている学生が約 4 割を占めており、LINE の活用は情報の周知や予約への導線として、有効なツールになっています。

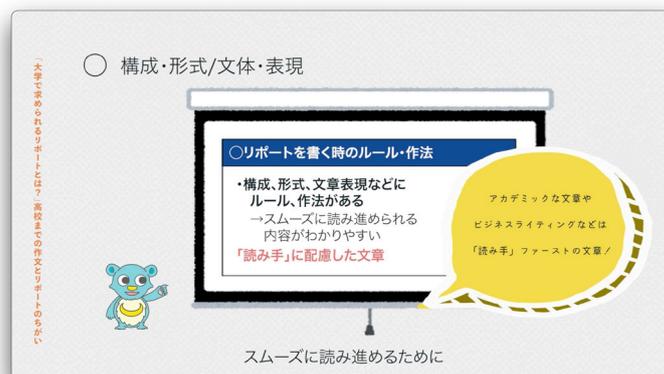
また、年 2 回、継続的に教職員向けの「ニュースレター」を発行しています。内容としては、ライティングセンターの活動紹介に加え、出前授業等の各種サービスの案内なども掲載しています。このニュースレターによってライティングセンターの存在を認知する先生方も多く、継続的に発行し続ける意味があると感じています。そのほか、依頼があれば基礎演習やゼミナール等を対象に、30 分程度でレポート執筆の基本やライティングセンターの紹介を行う出前講座を開講しています。こちらは年間で 5 件から

10 件ほどの依頼をいただいています。

また、現在「レポートサポートシリーズ」という動画教材も制作中です。これは、対面指導を受けるほどではないけれどもレポートについて学びたい学生、あるいはライティングセンターで指摘されたことを復習したい学生に向けた教材です。現在 14 本中 6 本が完成しており、来年度中の完成を目指して進めています。

今後の展望

最後に、今後の展望と課題についてです。ライティングセンターの対面指導は、45 分間の 1 対 1 セッションという形を取っているため、どうしても「敷居が高い」と感じる学生も少なくありません。今後は、こうした印象をやわらげ、より身近に感じてもらえるよう、接点を増やす取り組みを進めていきたいと考えています。たとえば、セミナー形式の体験セッションや、動画教材を通じた学びの機会を拡充することで、いざ困ったときに「ライティングセンターに相談してみよう」と思ってもらえるような環境を整えていきたいと思っています。



ライティングセンタースタッフと 受講生・利用者による座談会

ファシリテーター

久保 槇祐野 ライティングセンター契約助手

[第1部]

学部・大学院におけるライティング科目

登壇者



奥村 晴

ライティングセンター教育指導員/
学部授業受講生・Learning Assistant



竹村 衣織

ライティングセンター教育指導員/
大学院授業受講生



横山 和奏

文学部3年/学部授業受講生・
Learning Assistant



福山 佑樹

ライティングセンター 教育特別任期制教授

久保：それではこれより、受講生・利用者による座談会を始めたいと思います。ファシリテーターは私、久保が務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

本座談会の趣旨は、これまでに紹介した開講科目や対面指導において、実際にライティングセンターの活動に関わってきた受講生、科目の Learning Assistant（以下、L.A.）、対面指導の利用者、教育指導員の方々から、生の声や疑問を伺い、それに対して教員や助手の考えも交えながら、さまざまな角度から「ライティングセンターとはどのような場所なのか」を考え、理解を深めることにあります。

それでは早速、ライティング科目に関する座談会を始めたいと思います。まずは、本日の登壇者の方々に、順番に簡単な自己紹介をお願いしたいと思います。では、奥村さんからお願いします。

奥村：文学研究科博士課程前期課程2年の奥村晴と申します。私は2020年度、ライティングセンターの授業が開講された最初の春学期に、友人から「レポートを書くのが楽しくなる授業があるよ」と勧められて興味を持ち、秋学期に受講しました。その後、学部3年の春・秋、4年の春・秋と、通算4期にわたりL.A.を務めさせていただきました。その経験を買っていただき、現在はライティングセンターの教育指導員として活動しています。どうぞよろしくお願いいたします。

竹村：同じく文学研究科の竹村衣織と申します。学部3年生の2022年春学期に「レポート執筆の基礎(ハイブリッド形式)」を、大学院1年の春学期に大学院

科目「論文執筆のためのアカデミックライティング」を受講しました。現在はライティングセンターで教育指導員を務めています。本日はよろしく申し上げます。

横山：文学部3年の横山和奏と申します。私は2年生前期に「レポート執筆の基礎」を受講し、その後、2年生の後期から継続してL.A.を務めています。今年度は、新たに開講された「レポート執筆の応用演習」にもL.A.として関わる機会がありました。本日はどうぞよろしく申し上げます。

福山：ライティングセンターの教員を務めております福山です。私は2020年春のライティングセンター開設時に着任し、以降「レポート執筆の基礎」と「レポート執筆の応用演習」の授業を担当しています。本日はどうぞよろしく願います。

学部科目の受講

久保：それでは早速、学部科目の受講経験についてお話を伺っていきたく思います。まず、横山さんにお尋ねします。「レポート執筆の基礎」の授業をなぜ受講しようと思ったのですか？

横山：受講の動機としては、もともと文章を書くことに対する大きな苦手意識はありませんでしたが、文学部ということもあってレポート課題が多く、特に構成の立て方や引用の仕方に悩むことが多かったため、受講を決めました。

久保：多く課されるであろうレポート課題を見据えた選択だったということですね。では、実際に授業を受けてみて、良かった点はどのようなところでしたか？

横山：一番良かったと感じたのは、反転授業の形式です。講義動画でポイントを押さえてからワークや課題に取り組む流れだったので、「今、自分は何のために何をしているのか」が理解しやすく、非常に効果的でした。

久保：なるほど、反転授業によって学習の手段と目的が明確になったんですね。では、その授業を受けたことが、その後の学生生活にどのような影響を与えましたか？

横山：基本的なレポートの構成が頭に入った状態になったので、期末課題などでつまづくことはほとんどなくなりました。現在は3年生で、就職活動にも取り組んでいるのですが、自分の言いたいことを相手に伝えるために言葉を選ぶ習慣が身に付いたことで、インターン先での資料作成や面接も比較的得意だったと感じています。



久保：レポートに限らず、就活などさまざまな場面で「伝える力」が伸びたということですね。では続いて、奥村さんに伺います。受講のきっかけはお友達からの紹介だったとのことですが、実際に授業を受けてみての感想や、身についた力について教えていただけますか？

奥村：一言で言えば、「書くことが怖くなくなった」というのが大きな変化です。私は心理学を専攻していたのですが、授業では2,000字以上のレポート課題が出されることがあり、何を書けばいいのかわからず、とても不安でした。でもこの授業を受けたことで、「どう構成を立てればよいのか」が理解できるようになり、たとえば「この要素とこの内容で2,000字になるな」と見通しを持って取り組めるようになりました。おかげで、レポートを書くこと自体がずいぶん楽になりました。

久保：たしかに、いきなり2,000字と言われると途方に暮れてしまいがちですが、構成を学ぶことで「分量」への見通しが立つというのは、大きな成果ですね。

Learning Assistant (L.A.) の経験

久保：では、次の話題に移りたいと思います。横山さんと奥村さんは、いずれもL.A.としての活動もされています。そこで、L.A.として活動する中で、意識していたことや心がけていたことについても伺いたと思います。まずは横山さん、L.A.としてどのようなことを意識していましたか？

横山：やはり、受講者の多くは1年生で、全体の8割を占めることもあります。そのため、レポート執筆の前段階であるWordの使い方や、学内ポータルサイトの操作といった部分でつまづく学生も少なくありません。そうしたつまづきがあると、授業への参加自体が消極的になってしまうので、そうならないように、授業中は積極的に声をかけたり、こまめに見回ったりするように心がけていました。

久保：そうですね、先生にはなかなか聞きづらいことでも、L.A.のように細やかにサポートしてくれる存在がいるのは、学生にとって非常に心強いことだと思います。ありがとうございます。

では、奥村さんにもお伺いしたいと思います。奥村さんは、先ほどお話しされたとおり、通算4期にわたってL.A.を経験されています。多くの学生を見てこられたかと思いますが、印象に残っている出来事があれば、ぜひ教えてください。

奥村：そうですね、4期やらせていただいた中でずっと感じていたのは、最初の授業で受講生の皆さんが不安そうな表情で教室に入ってくることです。こちらとしても、「うまくサポートできるかな」と少し不安を感じる瞬間なのですが、授業が終わる頃には、皆さんが「2,000字書けました」と、晴れやかな表情になっている。そうした成長の姿を間近で見られるのは、L.A.としてとても嬉しく、やりがいを感じる瞬間です。

特に印象的だったのは、独自性の高いテーマに頑張って取り組んでいた学生さんのことです。授業ではレポートのテーマ設定が自由だったので、その学生さんは独自性の高いテーマを選び、粘り強く取り組んでいました。テーマが難しかったので、私と担当の先生と三人四脚のようなかたちで一緒に取り組みました。最終的には、学生さん本人も納得のいくレポートに仕上げることができ、私自身もその過程ですごく成長できたと感じたのが、印象に残っています。

久保：ありがとうございます。チャレンジングなテーマに取り組む学生と、伴走しながらその成長を見届けられたというのは、まさにL.A.としての醍醐味なのではないでしょうか。

大学院科目の受講

久保：ここで大学院科目についての話に移りたいと思います。竹村さんにお尋ねします。大学院の授業では、より専門的な内容も多くなるかと思いますが、「論文執筆のためのアカデミックライティング」受講の動機は何だったのでしょうか？

竹村：少し遡るのですが、学部時代の話からさせていただきます。私は総合心理科学科を専攻していて、2年生の時に実験実習の授業がありました。そこで出される実験レポートがうまく書けず、「このまま卒論に進んで大丈夫かな？」と不安に思っていたときに、このライティング授業があることを知って、受講を決めました。

そのときに、担当の先生から大学院向けの授業もあると聞いていて、卒業論文を書き終えた後も「もっときちんと書けるようになりたい」という思いがあ

り、大学院入学後に大学院科目の受講を決めました。

久保：総合心理科学科で多く課される実験レポートの課題に自信が持てなかったということなんですね。先生方からの評価も厳しいと聞いていますが、それでさらに学びたいと思われたとのこと、よく分かりました。では、大学院科目を実際に受けてみて、良かったと思われた点はどこでしょうか？

竹村：一番良かったと感じたのは、学部科目よりも受講者数が少ない分、先生とじっくり個別の課題について話し合える時間が確保されていたことです。自分がどんな点に課題を抱えているのかをしっかりと見つけていただけて、とてもありがたかったです。

久保：たしかに、大学院の授業は少人数になる分、一人ひとりへのサポートが手厚くなりますよね。ありがとうございます。ではもう一つ、伺いたいのですが、学部科目に加えて大学院科目も受講された中で、より「勉強になった」「成長を感じた」と思われた点はどこでしょうか？

竹村：学部の授業では、やはり基礎的な知識やスキルの習得が中心でした。一方で、大学院科目では、先ほど福山先生からもお話があったように、「ピアレビュー」が大きな特徴です。これが、非常に勉強になったと感じています。他の人の文章を読む、自分の文章を読んでもらってフィードバックを受けるというプロセスを通じて、自分の課題が明確になりました。私は、どうしても文章を簡潔に書きたいという気持ちが強すぎて、必要な説明まで省略してしまう癖があったんです。それをクラスメイトに指摘されたことで、自分でもしっかりと意識できるようになり、現在のレポートや論文執筆でも、その点に注意するようになりました。

久保：ありがとうございます。論文では、形式や構成だけでなく、伝えるべき内容をしっかり記述することが求められますから、そういった気づきがあったのは大きな成長ですね。では、ここまで3名のお話を踏まえて、福山先生から一言コメントをいただけますか？

福山：はい、今回のお話を聞いて、改めて学部生・大学院生・L.A.というそれぞれの立場で、それぞれに違った形の「成長」があったのだと感じました。学部授業を受講した横山さん、奥村さんからは、「書くことが怖くなくなった」「構成の見通しが立つようになった」といった声がありました。こうした「書くことへのハードルを下げる」ことは、学部段階のライティング教育として非常に大事なポイントだと再認識しました。

竹村さんは大学院科目で、「言葉を惜しんでしまい

伝わりにくくなる」という課題に気づいたとのことでしたが、これは専門家・研究者として「人に伝える力」を磨く段階に入ってきた証拠だと思います。そうしたステップアップが自然に見られていることは、教育者としても嬉しいです。

また、L.A.としての経験では、「ちょっとした確認を気軽にできる存在」であることの重要性が強調されていました。ライティングというのは基本的に一人で行う作業なので、孤独になりやすいんですね。そういった中で、先生以外にも頼れる存在がいることは、とても意味のあることだと感じました。

学生から教員への質問

久保：では、ここからは学生側から先生への質問を伺っていきたいと思います。まず、横山さん、お願いできますか？

横山：はい。先ほどもご紹介がありましたが、学部授業の最終回では、初回に書いた文章と最終課題で提出した文章を読み比べて、その感想を記述するというワークがありますよね。あのワークには、どのような意図があるのか、もし追加で教えていただければ、お願いします。

福山：ありがとうございます。このワークを行っている理由ですが、実はこの授業、「課題が多くて重い」と学生からよく言われるんです。2020年度の開講当初から比べると、実は課題の量は減らしているのですが、それでも重いと言われる（笑）。だからこそ、最後にただ「大変な科目だった」で終わらないようにしたいという思いがあります。「自分は最初こんなに書けなかったのに、今はここまで書けるようになった」と、成長を実感してもらおう。その達成感をもっ

て授業を終えてほしいという意図があります。そうすることで、「大変だったけど、良い授業だったな」と思ってもらえたら嬉しいですね。

久保：ではもう一つ、竹村さんから質問をお願いします。

竹村：はい。学生の書いた文章は、先生方から見るとまだまだ未熟だと思うのですが、「こういう力がもっと伸びれば、良い文章になるのに」と思う点があれば、具体的に教えていただけますか？

福山：難しい質問ですね。一番「もったいない」と思うのは、テーマ設定に悩みすぎて、肝心の「書く作業」にあまり時間をかけられないケースです。結局、テーマが決まらないと、資料収集や執筆が進まないですし、それで文章を十分に練る時間が取れずに終わってしまう。自分が受けている授業の中で疑問に思ったことや、日常の中で気になることなどから、自然にテーマを持ってくる力を養っておくと、もっと書く作業に時間が使えて、良いレポートができると思います。

ただ、テーマを決めるのにすごく悩むのも、もしかするとそれはそれでいいのかもしれない。1年生が「自分はあまりレポートのネタになるような物事に関心がなかったかもしれない、これはまずい」と気付くことも重要な成長なのかもしれない、と今ふと思いました。

久保：ありがとうございます。聞きたいことはまだまだありますが、授業に関する座談会はここで終了したいと思います。登壇者の皆さま、ありがとうございました。



〔第2部〕 対面指導

久保：それでは続いて、「対面指導」の座談会に入りたいと思います。中根さんから順番に自己紹介をお願いします。

中根：文学研究科 OG の中根有紀子です。博士課程後期課程2年のときに大学院のアカデミックライティングの授業を受講し、その後、教育指導員として2年半勤務しています。よろしくお願いします。

吉岡：人間福祉研究科博士課程前期課程1年の吉岡もとと申します。学部1年生だった2020年の春学期にスタディスキルセミナーを受講していました。大学院進学後はアカデミックライティングの授業を受講し、現在は教育指導員として働いています。本日はどうぞよろしくお願いします。

冷水：経済学部1年の冷水千夜莉と申します。ライティングセンターを2回ほど利用した経験があり、本日は利用者側の視点についてお話しできればと思っています。よろしくお願いします。

笠井：教務機構ライティングセンター契約助手の笠井遠音と申します。着任して約1年になりますが、皆さんにより良い情報をお届けできるよう尽力します。よろしくお願いします。

対面指導の利用

久保：では早速、皆さんへの質問に移りましょう。まずは対面指導の利用者である冷水さんと吉岡さんにお尋ねします。冷水さん、ライティングセンターという場所があることはどこで知りましたか。

冷水：大学入学後すぐにあった経済学部の新入生向けオリエンテーションで、事務の方から今後の学生生活に関する説明を受けました。その際、レポート執筆に困ったらライティングセンターという場所があるよ、ということを紹介されたのがきっかけです。

久保：新入生向けのオリエンテーションで知ったのですね。ライティングセンターは具体的にはどのような課題で利用しましたか。

冷水：「経済の歴史と思想」という、現代に至るまで

中根 有紀子

ライティングセンター教育指導員



吉岡 もと

ライティングセンター教育指導員/
対面指導利用経験者



冷水 千夜莉

経済学部1年/対面指導利用経験者



笠井 遠音

ライティングセンター契約助手



に考案された経済学の思想を学ぶ講義の平常レポートで利用しました。授業では先生がアダム・スミスやケインズなど有名な経済学者の思想を解説していましたが、平常レポートでは授業中に深く扱っていない部分について、自分で調べて述べるという課題でした。分量は3,000字から3,500字ほどでした。

久保：学部1年生の課題で3,000字から3,500字というのは大変ですね。実際に利用してみようと思ったきっかけや、困っていたことは何ですか。

冷水：大学に入学して初めて書くレポートだったので、構成や引用、参考文献の作法などに不安がありました。正しい知識を持っていなかったため、自分の書き方が正しいのかもわからず、ライティングセンターを利用しようと思いました。

久保：レポートの書き方に不安があったのですね。その課題で実際に対面指導を受けてみて、どんな印象や感想を持ちましたか。

冷水：私はレポートに関する知識がなく不安だったのですが、ライティングセンターでは専門知識を持つ指導員の方がアドバイスをくださり、一緒に考えながらレポートを改善できました。また個別指導の際に、各章の冒頭に要点をまとめておくと読み手にとって読みやすく、書き手も書きやすくなると教えていただきました。この点をその後の課題でも意識することでスムーズに書けるようになり、全体的なレポートの質も上がったと感じました。ライティングセンターは、1つの課題を改善するだけでなく、その後のレポート技術も高められるアドバイスを提供してくれる場所だと思います。

また、指導を受けた際には指導員の方が雑談などでリラックスした雰囲気を作ってくださいました。個別に対応していただけるので疑問点をすぐに質問しやすく、学びやすい環境だと感じました。

久保：たくさんお褒めいただき、ありがとうございます。2回のセッションの中でも次のレポート課題につながるアドバイスを受けられたとのこと、素晴らしいですね。では吉岡さん、ライティングセンターを知ったきっかけは何でしょうか。

吉岡：大学1年生のときに受講した「レポート執筆の基礎」で先生から案内があり、ライティングセンターを知りました。その後しばらく経って4年生になり、卒論執筆で行き詰まっていたときに図書館を歩いていたところ、ポスターを見かけたことが利用のきっかけです。

久保：図書館のポスターを見て利用して下さったのですね。卒論に向けて利用されたとのことですが、

使ってみていかがでしたか。特によかった点を教えてください。

吉岡：卒論で利用した際には、調査自体は順調で執筆の材料は揃っていましたが、章立てをして長い卒業論文を書くことが自分にとって大きなハードルでした。ゼミの先生からは研究内容の指導は受けられるものの、ゼミ生が多いため、書いた文章を細かく見てもらう時間を取るのには難しかったです。ライティングセンターのセッションでは大学院生の指導員がマンツーマンで対応してくださり、先生には普段聞きにくいことも気軽に相談できる雰囲気があって助かりました。また、自分の頭の中では言いたいことが整理できているつもりでも、第三者の視点から見ると文章に反映されていない点があると気付けたこともよかったです。

久保：忙しい先生には相談しにくいことも、セッションでは1対1で45分間じっくり話せますし、他者から客観的なコメントをもらうことはレポートや論文執筆にとって非常に大切です。

教育指導員の経験

久保：では次に、教育指導員に質問します。吉岡さん、指導員に応募したきっかけを教えてください。

吉岡：教育指導員への応募動機としては、これまでの経験や実際にセッションを利用した経験から、レポート執筆に困っている大学生が多いと感じたことがありました。提出期限に追われ、レポートを提出すること自体がゴールになっている学生も多く、文章の書き方などで初歩からつまづいている人も少なくありません。私自身もそうした学生だったこともあり、いつかサポートされる側から支援する側に回りたいという気持ちがありました。そんな折に大学院のアカデミックライティングの授業を受けた際、助手の方から「指導員として働いてみないか」と声をかけていただき、志望しました。



久保：声をかけてもらったタイミングもあり、サポートされる側からサポートする側へステップアップしたいと思われたのですね。指導員として活動していて、特にやりがいを感じるのはどんなときでしょうか。

吉岡：セッション中の対話で、学生さんが「自分のレポートに対して新たな気付きがあった」と感じられた瞬間に、特にやりがいを感じます。また、学生さんは「レポートを提出する」こと自体が目的になりがちですが、「何とかより良いものを書きたい」という思いでセンターを訪れてくださる方もいます。そうした方が、セッションを通じて主体的になってくれて、「ここはロジックが飛躍している」、「この主張は大きすぎるかもしれない」などに自分で気付く様子が見えると、やりがいを感じます。

久保：セッションの中で、学生が気付いたり、何かを学んだ瞬間に立ち会えることが、やりがいを感じる部分ということですね。ありがとうございます。では中根さんにも、最初の質問をさせていただきます。指導員へ応募した動機は何だったのでしょうか。

中根：私が応募した動機は、同じ研究科の友人がライティングセンターのアカデミックライティングの授業を受講し、その後ライティングセンターで指導員として働いていたことがきっかけです。その話を聞いて、私もその授業を受けたくて指導員をすることで、自分の研究に役立つ点があるのではないかと思い、応募しました。

久保：なるほど。ご自身の研究活動へのメリットも視野に入れていたのですね。中根さんは教育指導員を2年半されていますよね。もう大ベテランだと思いますが、さまざまなセッションを経験する中で、難しいと感じるのはどのような時でしょうか。

中根：難しいと感じる場面は本当に多いです。たとえば、学生に「より良いレポートを書いてほしい」という思いでアドバイスをしても、うまく伝わらなかったり納得してもらえない場合はどうしようかと悩みます。

あるいは、完成度が低いレポートを持ってきた学生がとても自信満々で「どうだ!」という様子のとき、どのようにアドバイスすればいいか迷うこともあります。一から十まですべての課題を指摘すると、学生のやる気を削いでしまうかもしれません。そういうときは学生に合わせた個別の対応が必要になりますので難しさを感じます。

ただ、やはり一番難しいのは、学生が持ってきた課題がそもそも何を求められているか分からない場合です。学生自身が課題の意図を把握していないことも少なくありません。私は担当教員やその授業に

ついて直接知っているわけではないので、学生から聞いた情報しか手がかりがなく、方向性が定まらないままセッションを進めざるを得ないこともあります。そういうときは特に難しいと感じます。

久保：レポートも学生も多種多様なので、それぞれに合わせた対応が必要な点は難しいですね。

研究活動への影響

久保：では次の質問ですが、中根さんは先ほど「研究活動を意識して指導員に応募した」とおっしゃっていました。教育指導員をする中で、ご自身の研究活動にどのようなメリットや良い影響がありましたか。

中根：先ほど申し上げた通り、私は「自分の研究に役立てたい」という思いもあって応募したのですが、実際にメリットはたくさんありました。私は博士課程に進んでから指導員を始めましたが、修士課程で学び修士論文を書き終えたあとでも、自分のアカデミックライティングに関する基礎知識で抜けている部分があると思わされることも多かったです。

セッションでは学生のレポートを見ながらアドバイスを繰り返し行うので、自分の論文を推敲するときにも問題をより早く発見できるようになりました。たとえば「この論点がずれている」など、ロジックの問題点に気付くスピードが格段に上がったと思います。そういう力が身についたことが一番大きなメリットです。

久保：ありがとうございます。セッションで日々鍛えられたことで、自分の論文の改善点も見つけやすくなったということですね。では吉岡さんにも同じ質問をします。指導員をしてみて、研究活動という観点ではどのような力が鍛えられたと思いますか。

吉岡：私は圧倒的に「読む力」が伸びたと感じています。約1カ月半にわたって新人研修を受けたのですが、その中で、一見きれいに見えるけれど、どこかモヤモヤするレポートを何度も精読しました。何度も模擬セッションをこなすうちに、「論点がずれている」などの問題点を見抜く総合的な読む力が身についたと思います。

具体的には、自分の研究のために先行研究を読む際、ただ情報を集めるだけでなく、「書かれている内容は本当に正しいのか?」と批判的に読むクリティカルリーディングの意識が強くなりました。そうした力が指導員としての活動を通じて鍛えられたと感じています。

久保：ありがとうございます。読む力は研究活動においても重要な力ですよ。では笠井さん、ここまでのお話を踏まえてコメントをお願いします。

笠井：私は教育指導員の方を教育・研修する立場にありますが、皆さんのお話を聞いて、ライティングセンターの理念である「自立した書き手の育成」が、研修や利用者への支援を通して指導員自身にも体现されていると感じました。利用者の方から「第三者のフィードバックは貴重だ」、「レポートの質が上がった」という声をいただけるのは支援者冥利に尽きると思いますか、私たちの活動がしっかり役に立っているのだと実感できます。

座談会総括

久保：では最後に、福山先生から座談会全体の総括をお願いいたします。

福山：まず、時間が無くなるほど登壇者の皆さんに熱く、たくさんのお話をいただいたことについて本当にうれしく思います。今回、受講生、利用者、L.A.、教育指導員、そしてライティングセンターの助手という多様な立場の皆さんから、それぞれがライティングセンターについて感じていることについてお話を伺うことができました。

まず、レポートに不安や戸惑いを抱える学生が、個別指導によって具体的なアドバイスを得られることで、次の課題への自信を獲得していることは非常に印象的でした。一方で「課題の意図が分からない」「学生によっては自信があるようであるが基礎が抜けている」など、アドバイスする側も苦勞する場面が多いことがわかりました。とはいえ、そのような困難なケースであっても、指導員の方々は「学生のやる気を損なわないように配慮しつつ、どう具体的に導けばよいか」を常に模索されており、その対話を通じてお互いが学び合っている姿がうかがえました。実際、「学生の文章を読む経験」によって「読む力」が鍛えられ、「自分の研究に還元できるようになった」といった声もありましたね。

繰り返しになりますが今回の座談会では、多様な立場からライティングセンターの価値が語られました。そこで見えてきたのは、ライティングセンターとは単に「書くことを支援する場」なのではなく、「一人ひとりにとって違った意味づけや成長がなされる場」だということです。私が想定していた以上に、受講生や指導員の皆さんがライティングセンターを通して成長していることを知り、大変うれしく思います。本日は貴重なお話をたくさん聞かせていただき、ありがとうございました。

閉会挨拶



児島 幸治

ライティングセンター副長 / 国際学部教授

ライティングセンター副長の児島と申します。私も先ほどの中野先生と同じく、「あなたは誰ですか?」と思われる方がほとんどかもしれません。私は実はこの役職を拝命するまではライティングセンターとの直接の関わりはあまり深くなかったのですが、2019年の設立時期に国際学部の教務担当・副学部長として教務委員会に出席していたことを思い出しました。あれからもう5年も経ったのかというのが正直な感想です。

2020年のコロナ禍のさなかに生まれたセンターではありますが、本日のシンポジウムを拝聴して、ここ5年の間に学部生や大学院生に非常に良い影響を与えてきたのだと改めて感じています。ライティングセンターの重要性を再認識する機会になりました。会の冒頭では、中野先生からセンター設立の経緯をうかがい、続けて時任先生のスライドによるご説明がありました。まず福山先生に開講科目の取り組みをご紹介いただき、その後、再び福山先生が利用者数など対面指導に関するデータをお話しくれました。われわれ「センター長」「副長」と呼ばれる立場ではありますが、コロナ禍以降の会議がZoom中心だったこともあって、実は直接現場で何が起きているかを詳しく知る機会があまりありませんでした。実際、ここにいらっしゃる先生方と対面でお目にかかったのは、私の場合、人生で数回ほどしかな

いのです。そういう意味ではお互いになかなか話をする機会が少なかったのですが、今回こうして生の声を聞かせていただけてありがたく思っています。

日頃、センターの運営や指導を支えてくださっている先生方や指導員の皆さまには、本当に感謝申し上げます。私は国際学部で会計学や経営学などを教えていますが、ゼミの学生には「ライティングセンターを利用してみたら?」と勧めています。彼らが対面指導を受けて修正したりレポートを見ますと、「これ、本当に自分で書いたの?」と思うぐらい内容が格段に良くなっているんですね。そうした光景を目にすると、ますますこのセンターのありがたみを感じます。また、本日は他大学のライティングセンター関係の方も多くご参加いただいているかと思えます。このように5周年記念のシンポジウムを開催し、多くの方にご参集いただけたことをうれしく思っています。

今後とも皆さまからのご指導やご鞭撻をいただきながら、5周年を迎えたライティングセンターを6年、さらにその先へと発展させていきたいと考えています。以上をもちまして、閉会のごあいさつとさせていただきます。本日は皆さま、誠にありがとうございました。



[主催]
関西学院大学教務機構ライティングセンター

[開催日] 2025年2月27日

[登壇者]

ライティングセンター長	中野 康人	教授
ライティングセンター副長	児島 幸治	教授
ライティングセンター委員	時任 隼平	教授
ライティングセンター教育特別任期制教授	福山 佑樹	教授
ライティングセンター契約助手	笠井 遠音	
ライティングセンター契約助手	久保 慎祐野	
ライティングセンター教育指導員	中根 有紀子	
ライティングセンター教育指導員	奥村 晴	
ライティングセンター教育指導員	竹村 衣織	
ライティングセンター教育指導員	吉岡 もと	
文学部3年	横山 和奏	
経済学部1年	冷水 千夜莉	

* 所属・肩書きは開催時のもの





関西学院大学教務機構ライティングセンター
5周年記念シンポジウム報告書

発行日 2025年8月24日発行
編集者 久保 慎祐野
発行者 中野 康人
発行所 関西学院大学 教務機構 ライティングセンター
〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155
電話：0798-54-7459
デザイン 黒木 歩

